

---

## ホモ・エクササイズ

— 障害者とともに生き抜くことへの賛歌  
(障害者との持続可能な共生へ向けて) —

文学部 河本 英夫

キーワード：障害者との共生、リハビリテーション、  
共生のための環境、言葉の働き

本作品は、TIEPh ホームページ(<http://tieph.toyo.ac.jp/>)からも鑑賞することができます。

(DVD 台本)

ホモ・エクササイズ  
— 生き抜くことへの賛歌

基調音 リベロタンゴ・ジャズヴァージョン

[スライド、ナレーション]

人間の最大の特徴は、知恵をもつ(ホモ・サピエンス、アリストテレス)ことでも、みずからを作り出す(ホモ・ファブリカトス、ベルクソン)ことでも、みずからを遊ぶ(ホモ・ルーデンス、ホイジンガ)でもなく、みずからを訓練できる(ホモ・エクササイズ)ことである。

ポール・ニザン『アデン・アラビア』冒頭

20 歳ぐらいの「発達障害児」のスライド(人見さんから借りる)

「20 歳、これが人生で一番美しい時期だなどと誰にも言わせはしない。」

[音、リベロタンゴ]

いったい人間は、自分の可能性のどの程度を活用できているのだろうか。1%、2%、5%、10%、15%程度だろうか。あるいは 70%、80%だろうか。それぞれの人間にとって、自分自身でさえ気づいていない可能性は、いったいどの程度あるのか。人間はつねに自分の可

能性を過小に、あるいは過大に見積もってしまう存在である。そしてこの見積もりから、絶望と希望がやってくる。(稲垣)

彼らは、自分の可能性のどの程度を実現できたのか。あるいは実現させようとしたのか。そして一生の終わりに何を思ったのか。(稲垣)

[ヘーゲル、マルクス、ベルナルド、フロイト、ユング、フッサール、サルトル、ラカン、メルロ・ポンティ、ペルフェッティ、ショウゾー、アキ等の自画像スライド]

[音、ベイジョス]

[ナレーション] 幼少期から、天性の詩人であった彼は、4歳から詩を書き始め、そして詩人の生涯を20代前半で放棄する。この500年に一人の天性の詩人は、みずからの生命に届く激しく、荒々しい言葉をもっていた。だがこの荒々しさは、精細さの放棄の代償ではない。

(セルに以下の文章を日本語で)

『急ごう。他に生活があるとでもいうのか。 — 金持ちの居眠りは不可能だ。いかにも富とはいつも公衆のものだった。清浄な愛だけが知識の鍵をあたえてくれる。自然は邪気のない見世物にすぎぬ。妄想よ、理想よ、過失よ、おさらばだ。』

天使らの正しい歌声が救助船から起こる、清浄な愛だ。 — 二つの愛だ、俺は地上の愛に死ぬる、献身の思いにも死ぬる。俺は多くの人を捨ててきた、俺が行ったら、彼らの苦痛は増すばかりではないか。貴方は俺を難破人の仲間から選んでくださる。取り残された人々は俺の女ではないか。

彼らを救いたまえ。

理性は俺に誕生した。この世は善だ。俺は生活を祝福しよう。同胞を愛そう。これは、もはや子供じみた望みではない。老衰と死とを逃れようとする願いでもない』

ランボー『地獄の季節』

[砂漠、スライド4-5本、アフリカ、地中海沿岸、イタリア、サントルツ]

[ナレーション] 彼は、この天性の言葉を捨てて、一生の大半を「砂漠の商人」として生きる。捨てることのできる言葉は、教えられた言葉ではない。みずから紡ぎ出すことのできる言葉のすべてを捨てて、彼は、砂漠で生きる。潤いに満ちた生命にも、乾きはある。だが生き抜くことの工夫に限りがあるわけではない。そう、言葉を捨てて戻って行った場所は、生命を再度作り直すことであった。

[ベイジョス]

工夫は人間に限ったことではない。植物にも、生きるための工夫がある。南米の湿地帯に生息するこのモウセンゴケは、虫が飛んでくると、花びらを閉じて虫を閉じ込めてしまう。花びらには、神経も筋肉もない。植物には一切の運動能力も、運動の仕組みもないはずである。だが花びらはみずからを作り変えることによって、虫を捕まえる。裏側の細胞が、30秒の間にそれぞれ3倍ぐらいに膨張する。

「アッテンボロー」(スライド、4、5枚)

この植物は、捕らえた虫から窒素化合物を吸収しているのではない。栄養は根から吸収している。するとこの植物は、何のために虫を捕らえているのか。やってくる虫には対応している。認知には理由はない。花びらを閉じることに理由はない。植物にとって、認知—運動は、一種の生命のフェスティバルである。よりよく生きることに、より希望に満ちて生きることに、理由はいらないのである。

動物 (スライド、砂漠の昆虫、カメレオン、トビウオの船超え、サケのダム超え)

より平穏な生はあるに違いない。舟を飛び越えなくても、ダムを飛び越えなくても、他の選択はいくらでもあったはずである。困難は意図して選ばれるのではない。だが身に振りかかる困難はつねに認知課題であり、問題解決を要請する。

音 ベイジョス

[ナレーション]

重度障害児は、いったい何を失っているのか。あるいは何を獲得しているのか。障害者は、可能性を失ったものではない。ただ可能性を実現するために、健常者とは異なる工夫が必要なのである。

リハビリテーションにおいてエクササイズとは、いまだ5%の可能性しか生きていないものが、いまだ2%の可能性しか生きられていないものへと向けて、生き抜くことのさやかな工夫の手助けをすることである。この工夫の継続が、それじたい、二人にとっての希望であるように。

[スライド、障害児が腕を伸ばし、何かを取りろうとしている場面、足を一步出そうとしている場面、起せないか身体をセラピストが包んでいる場面]

[愛の賛歌、日本語で稲垣が1番だけ歌う、バックにピアフのフランス語の歌をBGMとして一度流す]

・・・あなたの燃える手で私を抱きしめて・・・

障害児治療風景（3,4分）（スライド）

佐東利穂子（カザハナ、3,4分）

〔1分ずつ交互に、カザハナの音をそのまま使う〕

〔ナレーション〕 障害児と世界的ダンサーとの落差は、人間の可能性から見て5%以内である。（1分半後）

あらかじめみずからの可能性を限定するものにとって、この5%は気の遠くなるような隔たりである。（1分半後）

それは「運命」ではない。「運命」とは、あらゆる可能性に果敢に踏み出そうとはしないものにとっての言い訳にすぎない。（1分半後）

どのようなものにも、それが生きている限り、小さな可能性の煌きと揺らぎがある。それを感じ取ることは、生命の最大のチャレンジである。（1分半後）

躊躇と葛藤は、行為のための最大のチャンスである。（1分半後）

〔ナレーション〕 新たな経験を行ったとき、誰であれ言葉を失う。立てない子供が立てるようになったとき、驚きに満ちた歓喜のなかで言葉を失う。初めての一步を踏み出そうとするものが、とうとう一步を踏み出さずに立ち竦んだとき、当惑と困惑のなかで言葉を失う。設定した治療から先の見えない洞窟の入り口を垣間見たとき、厳粛な畏れのなかで、後悔と無力さのなかで、言葉を失う。言葉を語ることは、葛藤し、当惑し、困惑し、後悔する経験の中で、再度自分自身を獲得することである。人間は、一生をかけてみずからの言葉を何度も獲得する。

リルケ 「厳粛な時」

〔スライド、日本語、朗読ドイツ語稲垣〕（日本語を一度読み、ドイツ語を次に読む）

いまどこか世界の中で泣いている/理由もなく世界の中で泣いているものは/私を泣いているのだ。

いまどこか夜の中で笑っている/理由もなく夜の中で笑っているものは/私を笑っているの

だ。

いまどこか世界の中を歩いている/理由もなく世界の中を歩いているものは/私に向かって歩いているのだ

いまどこか世界の中で死んでいく/理由もなく世界の中で死んでいくものは/私をじっと見つめている

ポー〔ひとりで、訳をスライド4枚、1回目日本語、その後2枚目英語を朗読〕(人見)

子供時分から私は他の子供たちと違っていた—  
他の子供たちが見るようにはみななかったし、  
普通の望みに駆られて夢中になったりしなかった。  
悲しさだって、他の子と同じ泉からは  
汲み取らなかった—心を喜ばす歌も  
みんなと同じ調子のもではなかった—

そしてなにを愛するときも、いつも  
たったひとりで愛したのだ—だから  
子度も自分の私は一嵐の人生の前の  
静かな夜明けのころの私は—  
善や悪のはるかむこうの、あの神秘に  
心をひかれたのだった—そして今も、そうなのだ—

今も、あの奔い流れや、泉に—  
山のあの赤い崖に—  
金色にみちわたる秋の陽の  
自分をめぐる輝きに—  
疾風のように空をよぎるあの稲妻に—  
雷のとどろきに、そして嵐に—

そして雲に  
(青い大空のなかでそれだけが)  
魔力ある怪物となった雲に—  
そうなのだ、そんな神秘にひかれたのだ—

[ファースト・ラヴ、ヴァイオリン]

言葉は、どこからやってきて、私たちを貫いていく。どこかへと去ることもあれば、天啓のように私を支配することもある。言葉は身体にとって、経験にとって疎遠なはずだが、まるで空気のように身体と経験の隙間に入り込んでいる。言葉に満たされた隙間の密度を、人はいまだ一度も計量できていない。[スライド、そのまま朗読]

パスカル

詩の美しさというように、幾何学の美しさ医学の美しさといってもよさそうである。だがそうは言わない。詩の目的である快さとは何でできているかを人は知らない。そこでそれを知らないために人は妙な言葉を作り出した。黄金の世紀とか、現代の不可思議とか、宿命のとか、そういうものを。そうして人はこのしゃれた言葉を詩的美と呼ぶ。(『パンセ』)

フンボルト

言語の本質は、感覚としてあたえられた世界を思考の型に流し込むことであり、これが言語の作業である。

ソシュール

言語活動が思考に対してもつ特有の役割というものは、その音的、または物質的手段となることではなくて、思考と音の仲買的場を創ることである。その結果思考と音は否応なしに個別の単位を形成する。(『一般言語学講義』)

ルリア

子供の真の言語の第一歩、その言語の要素である最初の語の発生は、つねに子供の行為および子供の大人とのコミュニケーションと結びついている。子供の最初の語は、喉音と異なって、子供の状態を表しているのではなく、対象に向けられ、対象を表示する。しかしそれらの語は、はじめ、共実践的な特徴をもち、実践的行動に深く編みこまれている。(『言語と意識』)

ヴィゴツキー

言葉の意味は、思考が言葉と結びつき、言葉に体现されるるかぎりにおいてのみ思考現象となる。また逆に、それは言葉が、思考と結びつき、思想の光に照らされる限りにおいてのみ言語現象となる。それは、言語的思考あるいは意味付けられた言葉の現象であり、言葉と思考との統一である。(『思考と言語』)

ラカン

無意識は言語のように構造化されている。(『エクリ』)

[ファースト・ラヴ、ヴァイオリン]

中里先生の治療風景（5分）

〔スライド、緑と環境と建築、治療風景、BGM入れ、ジャズ・ワンダフル・ライフ〕  
ミタカロフト、養老その他できるだけたくさんさんのセルを入れる。

誰かに向かって語られているわけでは言葉がある。  
自分自身にさえ届かないと感じられる自分の言葉がある。  
その一言が、世界中を凍らせてしまうと感じられる言葉がある。  
語ったとたんに嘘になってしまう言葉がある。  
いくら語ってもおそらく何も通じないと感じられる言葉がある。  
語ったとたんに、自分の履歴が変わってしまうほどの言葉がある。

そしてなおも語らなければならないと感じられる言葉がある。

ホモ・エクササイズ!!

〔治療風景数点、背景映像〕

エンディング：認知運動療法のテーマソング

エクササイズ、それは障害者と私たちの希望の鍵である。

より良く生きることに、それ以上理由はいらない。

みずからを訓練できることが、人間の最初の第一歩であり、そして最後の希望である。

みずからの可能性を拡張し続けること、それこそエクササイズであり、それはとりもなおさず、障害者と私たちの生きる姿である。

出演

人見眞理

稲垣諭

和田真由

編集・制作

大崎晴地  
池田由美  
稲垣諭  
畑一成

作・演出 河本英夫

プロデュース 宮本省三

障害者とともに生きる環境では、独特のエクササイズが必要となる。  
たんに持続可能な環境だけでは、人間はみずからの可能性を拡張していくことができない。  
持続可能な環境は、それじたいのなかに選択肢を増やさなければならない。  
よりよく生きることができるようになる環境、それこそ私たちが望み、維持していかなければならないものである。